

# 琉球大学学術リポジトリ

## [報告書]国際キッチン・キトサン会議に参加して

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キッチン, キトサン, キチナーゼ, 国際会議, カナダ キーワード (En): 作成者: 平良, 東紀, TAIRA, Toki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016612">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016612</a>

## 国際キチン・キトサン会議に参加して

平 良 東 紀

\*琉球大学農学部

### Postscript after 9<sup>th</sup> international chitin-chitosan conference in Montreal

Toki TAIRA

*Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus*

Keywords : キチン, キトサン, キチナーゼ, 国際会議, カナダ

第9回キチン・キトサン国際会議が2003年8月27日から30日の間にカナダのモントリオールで開催された。会場は市の中心街にあるMontreal Marriott Chateau Champlainというホテルであった。

27日の夕方から歓迎会がホテル36階で行われた。私にとっては初めての国際会議で、どうしていいのやら…。大きな窓からはセントローレンス川に美しい夕陽が沈むのが見えていたが、緊張で楽しむ余裕は無かった。とりあえず、日本での共同研究者やアメリカでポストクをしている友人にサポートを仰ぎながら他国の参加者と話をはじめたが、なかなか聞き取れないし、話があまり通じない状況が続いた。こんなこともあろうかと、私はこの国際会議のために用意してきた名刺を差し出した。この名刺の表には私の顔写真と所属が、裏には現在私がやっている仕事が説明できるようなイラストと写真を入れていた(写真1)。この名刺のおかげで自分の研究をアピールでき、会話ははずむようになった。

28日から口頭発表とポスター発表が行われた。口頭発表(50題)は以下の8つのセッションに分かれて行われた。

\*沖縄県西原町千原1番地

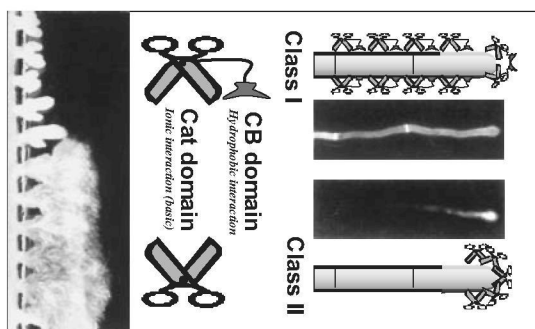
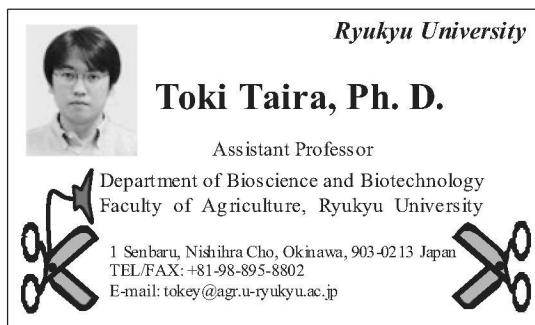


写真1. 国際会議のために作成した名刺

- General properties of chitin and chitosan
- Biochemical and biotechnological applications of chitin and chitosan
- Biological aspects of chitin and chitosan
- Agriculture and food applications of chitin and chitosan

- Synthesis and structural modifications
- Enzymatic and biological degradation
- Chitin/chitosan chemistry
- Commercial, industrial and regulatory aspects

参加者は約160名。内訳はカナダ43名、日本34名、アメリカ24名、ドイツ16名、タイ11名、中国10名、フランス8名、ノルウェー8名、ロシア6名であった。地元カナダと隣国アメリカの参加者が多いのを別にする、日本の参加者の多さが目立った。実際にこの分野での日本人研究者の活躍は目立っていた。特にキチン分解酵素やキトサン分解酵素の構造と機能においては日本のグループの研究がノルウェーのグループと並んで抜きん出ている。

私はポスター発表で参加した。冒頭の歓迎会の様子でわかるように英語に不安がある私はポスターセッションの時間は常にドキドキしどろどろであった。このポスターでも、内容の理解を助けるようなイラストをなるべく入れるように心がけ、図表のひとつひとつに要点のわかるように短いコメントをいれておいた(写真2)。とにかく「せっかくカナダまで来て発表するからにはなるべく多くの人に自分の研究を理解してもらおう」と努力してみた。内容はというと「Antifungal activity of class I and class II chitinases」という題で、植物由来キチン分解酵素(植物キチナーゼ)の構造と抗真菌活性(抗カビ活性)との相関の一部を明らかにしたという研究であった(植物キチナーゼは病原となるカビの主な細胞壁成分であるキチンを分解することによりその感染を抑制する生体防御因子のひとつと考えられている)。これまでに多くの研究者によってキチナーゼの構造と酵素活性との相関については詳細に調べられていたが、その生理的役割である抗真菌活性との相関についてはほとんど分かっていなかった。我々は新規に開発した抗真菌活性測定法と生化学的手法さらには部位特異的変異法等を用いて、極めてクリアにその相関を明らかにした。説明を聞いてくれた多くの人々の反応は良く、ある人からは“Excellent!”とお褒めの言葉をいただいた。これらの実験には、九州大学との共同研究で扱っているライ麦由来のキチナーゼと琉球大学で分離したガジュマルやパイナップルなどの熱帯・亜熱帯植物由来のキチナーゼを用いた。

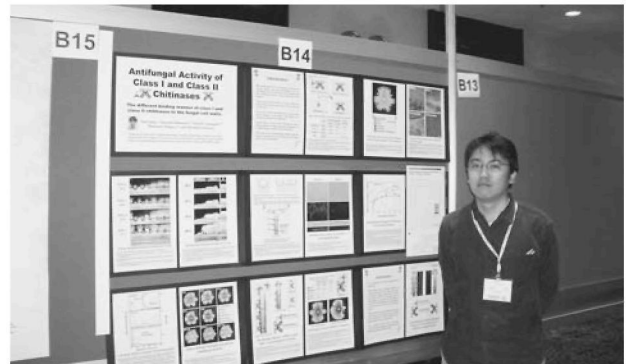


写真2. ポスター会場にて

宿泊地であったモントリオールはヨーロッパを感じさせる建物がたくさんあり、きれいな街並みを持った観光地である(写真3)。住民の多くはフランス系であり、町ではフランス語をよく耳にした。28日の夜には350年の歴史を有するオールド・モントリオール(18世紀からの建物や街並みが残っている場所)の考古学歴史博物館やノートルダム教会へ行き、モントリオールの歴史や文化を立体映画等のマルチメディアで学習した。マルチメディア・コンテンツは非常に良くできており、演出も凝っていた。その歴史的建造物がいかに価値のあるものかを伝えるための工夫がいたるところで見られた。観光立県を謳っている我が県も見習うべき点が多いように思えた。まとめると「人に何かを伝えることはどういうことか」を学んだ国際会議であったように思う。次回は2006年にフランスのモンペリエで開催される。

最後になりましたが、本会議に出席するにあたりご援助いただきました南方資源利用技術研究会に心よりお礼申し上げます。



写真3. モントリオールの街並み